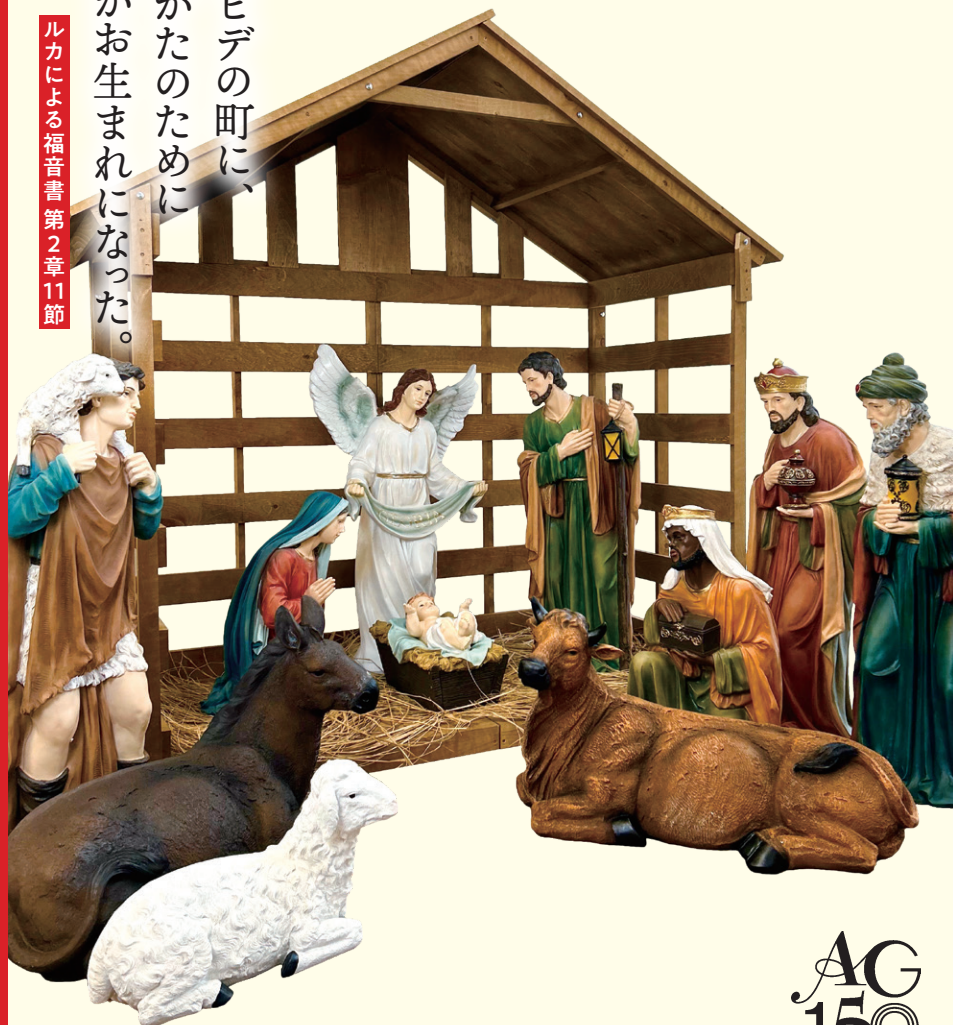


今日ダビデの町に、
あなたがたのために
救い主がお生まれになった。

ルカによる福音書 第2章 11節



AG
150
青山学院創立
150周年記念号

青山学院150年！ ミッショナリー・マインド

学院宗教部長

伊藤 悟



いつも喜んでいなさい。絶えず祈りなさい。
どんなことにも感謝しなさい。
これこそ、キリスト・イエスにおいて
神があなたがたに望んでおられることです。

テサロニケの信徒への手紙一、5章16～18節（聖書協会共同訳）

新しく何かを始めるときには勇気と決断が求められます。それを応援して見守ってくれる人も必要です。それに加えてキリスト教では、祈りが大切な働きをすると信じています。自分の計画が実現しますようにと祈ることがあります。一方、他人が自分のために必死で祈ってくれるということもあります。

キリスト教では祈りは、目に見えない神様との対話のときです。青山学院では礼拝の時だけではなく、色々な場面で祈ります。神様と相談するのです。私も目標や計画を立てるのだけれど、同時にそれが神様のご計画であるかどうかを確かめるのです。

青山学院の源流となった最初の学校「女子小学校」。その創立者ドーラ・E・スクーンメーカーは、150年前にメソジスト監督教会の最初の女性宣教師となりました。幼い頃から外国で宣教師になりたいという夢をもっていましたが、それが現実し始めるとドーラは一気に不安になりました。彼女は何度も神様に祈りました。「本当に私でよいのでしょうか。これは私の思いではなく神様の計画なのでしょう。私はそこに信頼して歩み始めてもよいのでしょうか」。彼女は祈りました。周りの人たちも祈りました。

今年の夏、私はアメリカのイリノイ

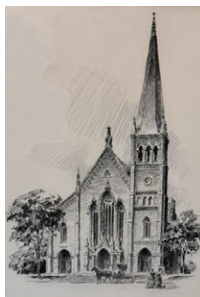
州にあるエバンストン第一合同メソジスト教会を訪ねました。この教会は、150年前の1874年9月20日にスクーンメーカーの宣教師派遣式が行われた教会です。その時ドーラは、世界のほかの地域に派遣される宣教師たちと一緒に、不安な面持ちでしたが、神様がお命じになる人生を歩み進むことを誓いました。そして「どうか私のために祈ってください」と人々に言いました。多くの人たちがドーラのために神様に祈りました。母との別れも辛いものでした。しかし神様がそのように示されるなら、そして何が起こるかかわからないけれど、神様が必要とされる場所、神様が送り込んでくださるところなら、そこに向けて出で立っていく。不安だけど、それは喜びであり名誉なことであると信じていました。ドーラは8歳の時から外国の宣教師になることを夢見ていました。そしてその夢は23歳の時に実現することになります。

青山学院に次々と派遣されてきた宣教師たちもみな同じでした。祈りながら、もしそれが神様の示されることなら、必要とされるどんなところにも出かけていく覚悟がある。この先何が起こるのかわからない。けれど、それが神様の召し (calling) であるなら、あるいは私を必要しているところがあるのなら、そこに出かけていく。それを「ミッシヨナリー・マインド」(宣教師の

こころ、心意気、感覚) と言ってもよいでしょう。「サーバントリーダー」でもあります。

青山学院には、このミッシヨナリー・マインドやサーバントリーダー・マインドが150年たった今も漂っているように思います。祈りの中で進むべき道を見出していきます。祈りながら確証を得て、未知の領域への一歩を踏み出していきます。他の人の行かないところ、避けて通るような道や、あえて困難な道を選んでいきます。

青山学院は今年創立150周年を迎えました。これからもミッシヨナリー・マインドを持ち続けたいと思います。サーバントリーダーをさらに育てていきます。いつも喜び、絶えず祈り、すべてのことに感謝する歩みを、青山学院を構成する私たち一人一人がこれからも大切にしていきたいものです。



左：ドーラ・E・スクーンメーカー
右：エバンストン第一合同メソジスト教会

創立150周年 記念特集

青山学院の創立150周年を迎えるにあたり、
学内外の皆さんに、創立150周年を記念して、
特別にメッセージを寄稿していただきました。

院長 山本 与志春

「地の塩、世の光」 サーバント・リーダーとして生きる

1874年、米国のメソジスト監督教会女性海外伝道局が日本に派遣した23歳の女性宣教師、ドーラ・E・スクーンメーカーは、日本到着からわずか3週間後に青山学院の最も古い源流である「女子小学校」を開設しました。「女子小学校」といっても、生徒は男子2人を含む7人のみ。教室は津田仙の隣家の一部屋であり、校舎も教科書も黒板もノートもない状況でした。それは学校というよりも、津田仙の家族や親戚知人を集めた私塾のようなものでした。しかし、ドーラ自身が言うように、その小さな学校は「暗きところに灯された小さき光」でした。

しかし、その小さな光は、ジュリアス・ソーパー宣教師やロバート・S・マクレイ宣教師が開設した「耕教学舎」や「美會神学校」と合流し、150年を経た今では幼稚園児から大学・大学院生まで約24,000人が学ぶ総合学園へと成長しました。スクーンメーカー宣教師は、学校に必要な設備がほとんどない中で、数人の生徒とキリスト教信仰を伝えたいという熱い祈り、そして持てる力を生徒に全て捧げる揺るがぬ決意だけを持って始めました。それは、イエス・キリストがレプトン銅貨2枚を捧げた貧しい女性を称えたように、額の



多寡ではなく捧げる心を顧みてくださるという信仰に基づくものでした。そして、少年が捧げた2匹の魚と5つのパンで5,000人の空腹を満たした奇跡のように、わずかな捧げ物でも神の祝福により大きな実を結ぶことができるという信仰でした。

7人で始まったこの小さな学校が、今日の青山学院に至るまで成長したのは、スクーンメーカー、ソーパー、マクレイの3人の宣教師をはじめ、多くの先達の献身的な奉仕のおかげです。彼らは命がけで日本に渡りました。青山の土地購入資金や校舎建設費などを多額の寄付で支援したジョン・F・ガウチャーは、校舎に自分の名前を付けることを断り、世界各地で援助活動を続け、自らの資産を子どもたちに残すことを選びませんでした。米山梅吉・初夫妻は、一汁一菜の質素な生活を守りつつ、緑岡幼稚園と緑岡小学校の開設に私財を投じました。また、勝田銀次郎や万代順四郎は、校舎建設や奨学金制度の創設に私財を惜しみなく捧げ、それを喜びとしました。

さらに、津田仙と本多庸一は、3人の宣教師を助け、草創期の青山学院に重要な役割を果たしました。二人は、青山学院やキリスト教発展のために死ぬ間際まで働き続けました。これらの方々は、青山学院のスクールモットー「地の塩、世の光」を体現するサーバント・リーダーとしての生き方を示しておられます。

青山学院の創立150周年を迎え、私たちはこの学院の歴史と使命を改めて見つめ直す機会を得ています。青山学院は、創立以来150年にわたり、建学の精神であるキリスト教信仰に基づく教育を目指し続けています。その目的は、単なる知識の提供にとどまらず、すべての人々と社会に対する責任を進んで果たす「地の塩、世の光」として生きるサーバント・リーダーを育てることです。それは、差別や迫害がなく、誰もが安心して暮らせる、武力によらない本当の平和な世界を作り出す人を育てることに他なりません。それこそが、青山学院の使命です。

この節目の年に、私たち一人ひとりが「地の塩、世の光」として、サーバント・リーダーとしてどのように生き、何を目指していくのかを考え、新たな一歩を踏み出していきたくと願います。

学院宣教師 REEDY, David W

青山愛、日本愛 (引退宣教師の思い出)

私の父 Boyd Ray Reedy は青山学院及び日本を愛していました。2024年の6月10日に天国に旅立った150周年の年のクリスマス号では父の「青山愛、日本愛」をご紹介します。

Boyd Reedy は1927年アメリカのテキサス州で David Watkins Reedy の長男として生まれました。(数十年後、息子に同じ名前を命名します)そして18歳の1945年の戦争終了後の占領軍として初めて来日しました。焼け野原の日本を目の当たりにして悲しみを憶えると共に、その時に会った日本人との触れ合いを忘れられず、いつかこの国に戻ってくることを決意しました。アメリカに戻ってからは大学を卒業し、宣教師として日本に戻ることを決意し、大学院を卒業したのち合同メソジスト教会から日本へ派遣が決まりました。

再び日本に訪れた際には三軒茶屋のアパートに John Krummel 先生(元青山学院宣教師)と生活をしながら日本語学校で一定の日本語力をつけるために勉強を始めました。

そして1956年に青山学院で宣教師生活が始まることになりました。当初は父が大学で Krummel 先生が高等部で教鞭を取る予定でしたが、Krummel 先生が大学の配置を希望し、父は高校の方が生徒と接する機会が多いと思ったようで二人の宣教師の配置換えがありました。そして若いクリスチャンの集まりで出会った田中実子(後に青山学院宣教師 Reedy 実子)と1964年に当時の青山キャンパス内の礼拝堂で結婚式を挙げ、それから1992年までの36年間高等部で、そして学院宣教師として色々な経験をさせていただきました。そして1992年のカリフォルニア州にある引退



贈答された金木犀の苗



Boyd Ray Reedy 宣教師

した宣教師のコミュニティで生活をしておりました。引退後も何度か日本を訪れましたが、その度にカキフライ、肉そば、うなぎは必ず食べていました。また、亡くなる直前まで高等部での話はいつもしていました。初めて修学旅行に行った時、ホームルームを持ちたかった話、入試作業の話、理事会での話など話しだすと止まらないほど青山学院の話をするのが好きでした。

父は役員として理事を1985年から1994年まで3期、そして評議員は1969年から1977年、そして1985年から1994年まで9期、2007年に来日した際に名誉理事の称号を12月の学院クリスマス礼拝の場で与えられました。

最後に：高等部時代、毎年9月から10月に高等部門を通るたびに香っていた金木犀の香りが忘れられなかった父は2年ほど前に金木犀の苗を贈答しました。大学側から高等部の入り口の左手前にありますのでお時間がある時に金木犀の香りが感じられる秋にお立ち寄りください。

日本聾話学校教員 飛田 貴基 (校友)

地の塩・世の光として

青山学院での18年間を考える時、仲間との青春の記憶と共に、日々の礼拝、そして日常の様々な所にあった祈りが思い出されます。幼稚園から大学まで、一貫して私を支えてくれたものはこの祈りであり、《必ず誰かがいてくれる、誰かが覚えていてくれる、誰かが祈っていてくれる》という安心感と、《そしてあなたもまた、その誰かになることができる》という励ましだったと感じています。

特に、先生方に祈っていただいた記憶は多く、幼い頃に友達とケンカをした時、先生が二人の手をとって祈って下さったこと、そしてまた暴れん坊だった私を抱き締めながら一緒に祈ってくれたこと。高等部に入ってからも、悩み苦しんだときに家に電話をくださり祈りの言葉をかけてくださった先生がいたこと。例を挙げれば枚挙に暇がありません。こうして思い返しても、何とも多くの先生方にご心配とご迷惑をおかけしてきたものと反省し、そして感謝をしているところです。昨年末の事になりますが、幼稚園でお世話になった先生に同級生と一緒にお会いする機会を得ました。その際にも先生が「みんなのためにお祈りしてもいい？」と変わらぬ優しい声をかけてくださり、祈っていただきました。久しぶりに聞く先生の力強くも暖かい





祈りの声に私たちは少し涙ぐみながら、こうして青山学院で育ってきたのだと再確認ができたものです。

私は現在、日本聾話学校という学校で教員をしています。聴覚に障がいのある子どもたちのための、小さな小さな学校です。日本聾話学校もまた、神様によって建てられた学校であり、私も生徒と共に祈りつつ過ごしています。たくさんの方々には祈られながら創立104年目を迎え、青山学院の皆様からも幼稚園から大学まで本当に多くの方々にお支えをいただいています。昨年11月、私は初等部の礼拝で日本聾話学校のことを話す機会をいただきました。また、この10月には中等部の生徒35名が来校して交流し、生徒同士が礼拝の中で共に祈る「祈りの輪礼拝」を行いました。こうして今もまだ、祈りを通して青山学院と繋がる事が出来ていることに感謝します。

社会に出てからこそ、地の塩・世の光としてどのように生きていくかが問われます。大学を卒業して14年、まだまだ答えは出ませんが、今も昔も、たくさんの方々の祈りの中にいることに感謝し、これから先の人生も自分自身に問いかけていきたいと思っています。

青山学院創立150周年、心からお祝い申し上げます。

クリスマスを迎える喜び

皆さんは今年のクリスマスをどのように迎えますか？
幼稚園から初等部、中等部、高等部、大学の皆さんに、
2024年のクリスマスを迎えるいまの想いや喜び、
クリスマスの思い出を綴っていただきました。

幼稚園教諭 迫田 敏幸

新たにされて、今思う

様々なことに慎重であった自分が10年前に信仰告白をすることができたのは、教会や周囲の方との交わりを通して「まずは一步を踏み出してみよう」と思えるように、神様が私を変えてくださったからです。その後の10年を今振り返って思うのです。日々の悩み不安、選択決断、それらが訪れたときに、自分の周囲の人間を通して、頬を揺らす風を通して、道端に咲く花に注がれる光を通して、神様は自分にメッセージを語りかけてくださっている。「あなたは一人じゃない。大丈夫」そう思えるようになったことは、問題をすぐに解決することよりも遥に大きな恵みであると思うのです。

世界で様々な理由で悲しみや苦しみ、憎しみを覚えている方々を思う時、私たちのすぐ隣にも同じような思いで心がいっぱいになっている方がいるかもしれない。どうかその方々が、すぐ近くの人を通して、出来事を通して、ふと目をやった先に咲く一輪の花を通して、神様の愛が自分にも確かに注がれていることを感じることができるようにと祈りつつ、アドヴェントを迎えたいと思います。





幼稚園教諭 赤坂 洋子

賛美し待ち望む

毎年11月半ばを過ぎる頃から、幼稚園ではアドベントやクリスマスのさんびかや歌をたくさん歌います。その中から、毎年アドベントが近づくとまず歌い始める1曲をご紹介します。



『アドベントクランツに』 作詞／作曲 富岡正男

アドベントクランツにあかりがつくと
神の子 イエスさまの お誕生が近くなる
まことのひかり イエスさまのお誕生を
みんなが待っています みんなが待っています

(キリスト教保育連盟『幼児さんびかII』より)

アドベント礼拝ではアドベントクランツに点された灯りを見つめながら、このさんびかを歌います。毎週1本ずつ増えていく灯りと「イエスさまのお誕生をみんなが待っています」との賛美の歌声が合わさり、子どもたちの中の赤ちゃんイエスさまをお迎える期待や喜びも少しずつ高まっていきます。

国内外において自然災害や人間同士の争いが絶えない今、今年もまたアドベントを迎えられることに感謝し、子どもたちと賛美し祈りつつ、このときを過ごしたいと思います。

初等部教諭 飯澤 正実

闇夜を照らす光

「私を信じる者が、誰も闇の中にとどまることがないように、私は光として世に来た。」(ヨハネによる福音書12章46節)

ぼくは牧師の家庭に育ち、父が牧師をしていた時にはその教会に住んでいた。その教会の玄関近くには大きなイチヨウの木があった。地域伝道に燃えていた青年会の仲間たちと相談して、教会のイチヨウの木にクリスマスツリーをつけることになった。そのモデルになったのが、青山学院の美しいクリスマスツリーであった。木のでっぺんにつける星もツリーもすべて自分たちの作ることにしたが、素人の作業は試行錯誤を繰り返した。その間、多くの教会員が祈り支えてくださったことは感謝であった。何か月もかけて完成させたツリーの取り付け作業も自分たちで木に登っておこなった。

闇を抱える私たちのために、光として、命として、イエス・キリストは誕生された。

もう40年近くも前のことだが待降節になると、そのクリスマスツリーの光は輝き、救い主イエス・キリスト到来の喜びを世の人々に伝えている。





初等部3年 藤田 芽生

きみは愛されるために 生まれた

みなさんは「きみは愛されるために生まれた」というさんび歌を知っていますか。『初等部さんびか』2-49です。韓国で作られたさんび歌で、キリスト教徒だけでなく、韓国人みんなに愛されている曲です。韓国語では「タンシンヌンサランパッキウィヘテオナンサラン」あなたは愛を受けるために生まれた人という意味です。

私の両親は韓国で出会って、お母さんが具合がわるい時にはいつもお父さんが手をにぎってこの歌を歌ってあげるとなあったそうです。私が生まれる時も、じんつうで苦しむお母さんに、お父さんがこの歌を歌ってあげたら私が生まれました。この歌はクリスマスのための歌ではないけれど、私たち家族はクリスマスに歌います。なぜかというと、お母さんがはじめてお父さんの家族と韓国でクリスマス礼拝に行った時に、この歌を歌った思い出があるからだそうです。私たち家族にとって大切な曲なので、『初等部さんびか』で見つけた時はとてもうれしかったです。これからもクリスマスには家族でこの歌を歌って神さまにおいのりします。

中等部教諭 伊藤 秀行

ドイツのクリスマス



クリスマス4週間前、アドヴェント（待降節）の訪れとともに家庭や教会ではもみの木の葉やドライフラワーで作った克蘭ツと呼ばれる輪飾りに4本のローソクを立て、日曜日ごとに1本ずつ火を灯していきます。こうして、クリスマスは静かに幕を開けます。

各市町村の中心部には「クリスマスの市」が設営され、そこには、クリスマス関連のかわいい小物店や飲食店が素敵な装飾を施し並びます。人々はささやかな幸せを求めお店を回ります。凜としたドイツの冬に冷え切ってしまうそうですが、焼きソーセージや温かいワイン（グリューワインという）を味わいながら回っていると寒さも忘れてしまいます。

クリスマスイヴには、学校はもちろん会社や商業施設も2日半（イヴ24日は13時で閉店）のクリスマス休暇に入ります。日本のようにジングルベルにのってケーキを売る光景は見られず、人々は各家庭でプレゼントを持ち寄り、ツリーの傍らで手作りの料理とケーキを食べながら心豊かな時間を過ごします。

至福の時と言っても過言ではないほど、クリスマスシーズンはドイツ人にとって最も楽しみであり大切な時間の一つなのです。私が過ごした当時より移民や観光客が増え混みあっていると聞いていますが、伝統を重んじるお国柄ですから質素で静かなクリスマスは途絶えることなく継承されていくことでしょう。





中等部3年 木佐貫 謙

宿屋と僕

「どこのお部屋もいっぱいですよ、困った困ったどうしましょう♪」

これは、僕が幼稚園児だった頃のクリスマスページェントで宿屋が歌う歌の一部である。僕は初等部から青山学院に通っているが、幼稚園もキリスト教系だったので幼少期からキリスト教が身近なところにあり、数々のクリスマスページェントにも参加をしてきている。振り返れば幼稚園の頃に1回、教会学校で1回、初等部の英語の劇で1回と計3回も宿屋の役をやっていたことが思い出される。

ページェントで宿屋は、マリアとヨセフが宿を探している時に「空室はない」と言って追い返すシーンで登場する。これは、人口調査で人々がそれぞれの故郷に戻ったから発生した状況だが、ここではイエス・キリストが人々に受け入れられないということも表していると聖書の授業で習った。こうなると僕は宿屋役として3回、イエスを拒否し続けたということになるが、実際の自分はどうか。今すぐに全てを信じろと言われてたら難しいかもしれないが、時間をかけてイエスを自分の心の中に迎え入れられるようにしたい。

高等部教諭 池田 敏

忘れられないクリスマス

39年前、私は青年海外協力隊の隊員としてケニアで暮らしていました。ビクトリア湖のほとりに住み、その地の中学校で教えていました。大家さんから、クリスマスには一族が集まるので、部屋を明け渡して欲しいと言われました。仕方なくナイロビの協力隊員の寮で過ごしたのです。マラリアが発症したのは寮で、一人の時でした。クリスマス休暇を寮で過ごす者はほかにいません。クリスマス直前にたまたま寮に立ち寄ってくれた人が私に気付いてくれて、医療機関に連れて行ってくれました。特効薬の注射をしてもらい、その日のうちに元気になりました。

ケニアはキリスト教国。ナイロビにも素敵な教会がたくさんあります。元気になった私は、イブ礼拝をささげる教会を探しました。イブの夜、訪ねた教会は、石造りの荘厳な会堂で、たくさんの方が集まっていました。赤道直下のケニアの12月は冬ではありません。季節感の乏しいイブ礼拝。その祝祷の後、会堂に集まった人が皆で「Peace, from this place of peace…」と歌いながら

近くの人と握手をします。そこで出会った人に、翌日、お茶に呼ばれました。30年間宣教師をしているご夫妻で、クッキーをいただいてたくさんお話をしました。

世界のどこにいてもイエスさまの誕生を喜ぶ家族がいることを実感した出来事でした。





高等部3年 渡邊 裕貴

慈しみ

私の家では毎年、クリスマスを迎える前にひとつ、木製の小さな人形やオーナメントを買っています。木、天使、羊飼い、博士、ヨセフ、マリア、そしてイエス様。毎年ひとつひとつ飾り付けるたび、新しい仲間をどこに置こうか、と家族で話しながら決めています。木の人形には顔がなく、シンプルな見た目とつりとした手触りは、どこかに温かさと優しさを感じさせてくれます。こういった素朴さと柔らかさの中に、神様が与えてくださった生命の喜びとその美しさが見つけられるように思います。

本来のイエス様の誕生日は12月ではないし、博士が来たのは誕生よりずっと後だという話を思い出しました。それでも、この日に世界の人々が改めて神様の愛と恵みについて考え、平和を祈ることに意味があるのではないのでしょうか。

とはいえ、今の世界は大変な状況に置かれています。痛みや苦しみの中にある人はクリスマスをどう捉えるのでしょうか。私たちは恵まれた環境にいるのに、祈ることしかできないという無力さを感じます。どうか、世界が穏やかな平和で包まれますように。

文学部准教授 DE LENCQUESAING, M.

クリスマスの思い出

8年前、日本で初めてのクリスマスを迎えました。

私は伝統を重んじる家庭で育ちました。毎年12月の上旬には、どこか神秘的で神聖な雰囲気 が漂い始めます。しかし、フランスから10,000km離れたここ日本では、クリスマスの雰囲気は一切なし！ どうせなら雪国でクリスマスを過ごしたいと思い、北海道に旅行しました。

23日の夜に函館に到着すると、世界の色が変わっていました。どこもかしこも真っ白で、故郷のクリスマスを思い出しました。ただ残念に思ったのは、アメリカ人歌手の歌う甘ったるい曲がどこに行っても聞こえてきたこと。ここ日本では、クリスマスが恋人たちの催しになっているということを知らなかったのです。

カトリック教徒はミサの厳かな雰囲気を好みます。私に必要なだったのは、マライア・キャリーの歌でもフライドチキンの香りでもなく、聖歌やお香の香りでした。ところが、思ってもみなかった幸運が訪れました。泊まっていた小さなペンションのすぐ隣で、クリスマスのミサが行われたのです。この教会は床が暖められていて、入るときに靴を脱ぎます。フランスでも、天井の高い古い教会には床暖房が入っているところがありますが、靴を脱ぐことは御法度。足を温めるには、こっそり靴を脱ぐしかありませんでした。

ミサの後で母に電話をし、「クリスマスのミサに靴を脱いで参加したわ！」と伝えたところ、母は「何てこと！」と驚いていました。子供の頃の願いが日本でやっと叶った気分でした。



社会情報学部4年 林 優芽



希望の季節がやってきた!

私は4年生の前期をフィリピンのセブ島で過ごしました。

フィリピンでは9月から12月がクリスマスシーズンで「Ber Months」と呼ばれるイエス様の降誕を待ち望む時期であると学びました。実際に8月の終わりから街にはクリスマス商品が並び9月にはオーナメントが飾られ始め、至る所でクリスマスソングが流れます。街全体が希望に満ちた雰囲気に包まれていく様子を目の当たりにしました。

フィリピンは発展途上国で、多くの人々が貧困の中で暮らしており、一歩外に出ればホームレスやストリートチルドレンと出会います。しかし、彼らの顔には希望があり、街には笑い声が溢れています。

彼らとの生活を通して、イエス様の「希望の光」は誰もが待ち望み、受け取って良いものであることを感じました。そして、その優しく温かい愛は誰にでも漏れることなく注がれていることを身をもって体験しました。忙しなく時間が流れるこの日本でも、イエス様がこの地上に来てくださる大きな喜びに目を留めながら歩んでいきたいです。



新宗教センター紹介

青山キャンパスの宗教センターは、今年の9月2日と3日で間島記念館からスクーンメーカー記念館(旧女子短期大学図書館)に引っ越しをしました。

新しい宗教センターは、スクーンメーカー記念館の地下1階から地上3階までを使用し、学生ラウンジ、学生集会室、器楽練習室、ウェスレー図書室、事務室、祈祷室、教員研究室等を有し、キャンパスミニストリー(キリスト教活動)に相応しい活動拠点となりました。

宗教センターは、たくさんの人のお祈りと献金により1968年に建てられ、現在は残っていない「ウェスレーホール」(旧東門付近・現在幼稚園敷地内)から始まり、その

後、「間島記念館」→「ウェスレーホール」→「間島記念館」、そして今回、「スクーンメーカー記念館」へと何度か移転してきました。

青山学院に集うすべての人々にキリストの福音を宣傳伝え、キャンパスミニストリーを展開するために、更なる環境整備をしていきます。

スクーンメーカー記念館は、ジェンダー研究センターとも建物を共有しています。ジェンダー研究センターと共に、これからも、一人ひとりの個性を大切に違いを理解しながらグローバルな視野を養うことができる環境を創っていきます。宗教センターは、子どもたちや学生が、将来社会で活躍する際、他者を理解し国際的感覚を持ち、福音の種を蒔き続けるような人材を養うために、この場所を有効活用したいと思います。

事務長 渡辺 恵



上：スクーンメーカー記念館
中：事務室
下：集会室

シャローム・ライブラリー

大学宗教主任 シュー土戸 ポール

青山学院の建学の精神を体現する象徴的なスペースとして、新たに開設された「シャローム・ライブラリー」が、大学新図書館の入るマクレイ記念館の2階に誕生しました。

このコレクションには、2017年に閉館した東京・銀座の「聖書図書館」が所蔵していた世界各地の聖書コレクション2726冊が、一般財団法人日本聖書協会からの寄託により収蔵されています。グーテンベルク聖書（複製版）をはじめ、江戸時代の日本語聖書や明治時代のアイヌ語聖書など、ラテン語から多様な部族語にわたる500以上の言語で記された聖書が集められています。さらに、ジョン・ウェスレーやメソジスト教会に関連する書籍の充実も考えており、信仰と学問の交差点として重要な役割を果たしています。

シャローム・ライブラリーは、本学の学生はもちろん、研究者や一般の来館者にとっても、平和への祈りを込め、青山学院の精神に立ち返る象徴的な場所となることが期待されています。ここはまた、知の新たな拠点として、信仰と学問を結びつける役割を果たす場でもあります。

さらに、開架されてはいませんが、稀覯本とされる貴重な聖書コレクションも保有しており、定期的に展示を行い、学生や来館者が直接その貴重な資料に触れる機会を提供しています。ライブラリー内には、相模原キャンパスのウェスレーチャペルにも作品を手掛けた滝澤やまと氏によるスタンドグラスが展示されており、美術館のような美しい空間が広がっています。

中には勉強するスペースも用意されていますので、貴重な本に囲まれながら、学業に励むことができます。



創立150周年記念諸行事報告 (実施済のみ)

狂言「復活」公演

(4月27日(土)、青山学院講堂)

校友の和泉流宗家皆様をお迎えして、「キリストの復活」の狂言を公演していただきました。



バッハ・コレギウム・ジャパン レクチャー・コンサート

(7月13日(土)、ガウチャー記念礼拝堂)

クラシック音楽を通してキリスト教音楽への理解を深めるコンサートで、バッハの音楽において世界的に活躍しているバッハ・コレギウム・ジャパンの鈴木優人氏をお招きし、講義と演奏をしていただきました。



オール青山ハンドベルコンサート

(9月21日(土)、青山学院講堂)

39回目のオール青山としてのコンサートを、初等部、中等部、高等部、大学、同窓会、系属校が参加して、実施しました。



福本茉莉パイプオルガンコンサート

(10月26日(土)、ガウチャー記念礼拝堂)

校友の福本茉莉氏をお迎えして、オルガン演奏とお話をしていただきました。



編集後記

青山学院150周年を記念するクリスマスに素敵な特集号を皆様にお届けいたします。青山学院が150年の年月を重ねるのに色々なことがありました。また多くの方々の献身的な働きがありました。そして、キリストと青山学院を愛する人々によって支えられてきました。その思いが溢れる特集となっています。クリスマスを迎える喜びを紹介した各部の生徒・学生・教員のお話はどれも心温まる素敵な文章です。今回紹介する特に大きな出来事はシャローム・ライブラリーの開設と宗教センターの移転です。どちらも素晴らしい環境が与えられました。ぜひ皆様訪れてください。そしてリーディ先生のお父様が寄贈された金木犀の香りをぜひ味わってください。執筆して下さった皆様に心から感謝申し上げます。お一人お一人の上にクリスマスの良き訪れがりますように祝福をお祈りしています。

大学宗教主任 森島 豊

Wesley Hall News 第146号

2024年11月25日発行

発行 青山学院宗教センター
学院宗教部長 伊藤 悟

編集 青山学院 Wesley Hall News 編集委員会
〒150-8366
東京都渋谷区渋谷4-4-25
TEL 03-3409-6537 FAX 03-3409-8865

デザイン 株式会社マツダオフィス
印刷 株式会社イニユニック

URL <http://www.aoyamagakuin.jp/rcenter/index.html>
MAIL agcac@aoyamagakuin.jp みなさんの感想をお聞かせください

青山学院スクール・モットー

地の塩、世の光

The Salt of the Earth, The Light of the World

(マタイによる福音書 第5章 13-16節より)